

# のめり込み 著書も

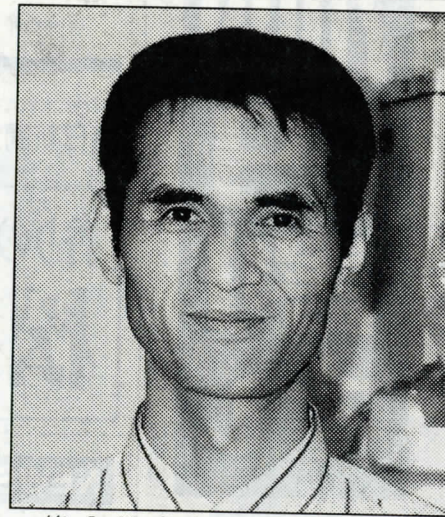
## 引力に逆らい戻る不思議

「プーメランはどの程度、普及しているのですか？」  
 西山教授 2年に1回、世界大会が開催されるなど、スポーツとして定着しつつあります。日本の競技人口は多く見積もっても1000人くらい。しかし、90%以上の人は、名前を聞いたか、「くの字」形のプーメランを見たかという程度です。これが潜在的なプーメラン人口と言えないでしょうか。

——著書の内容は？  
 西山教授 タイトル通り、プーメランが戻って来る理由を解き明かしたものです。垂直に投げたプーメランが戻って来る時、水平になっている理由も説明しています。それぞれ違った理屈があり、一言では言い難い。まさに1冊の本が出来るほどの内容です。

——研究に着手したのはいつから？  
 8年。94年によろやく、出版

西山 豊  
 大阪経済大教授に聞く



歌謡曲がありますが、振り付けが「横投げ」になっていました。あの影響は大きい。最近、コマージュで使われた時「プーメランは垂直に投げるものだ」と指摘したことがあります。しばらくすると別のバージョンに変わっていました。

——研究を始めたきっかけと魅力は？  
 西山教授 地球上のすべての物体は引力に支配され、投げれば必ず落下する。ところがプーメランは、その法則に逆らうかのように、地面に落ちず手元に戻って来る。その理由を知りたかった。理論が分からないところに学問としての魅力が残っていたんですね。それが研究にのめり込んだ動機であり、最大の魅力です。

興味を持たれた方はぜひ、日本プーメラン協会(事務局・東京都千代田区、03・3261・9304)へ連絡して下さい。

# プーメラン

## きょうのテーマは

【勝野俊一郎、栗林創造】

# はまりました



きっかけは9月16日掲載の紙飛行機の記事だった。「同じように空を飛ぶプーメランに一度、触れてみませんか」と連絡してくれたのは、プーメランストラクターの梅井靖弘さん(25)＝大阪狭山市大野台1。秋の澄んだ青空に誘われ、私、勝野がさっそくチャレンジしてきました。

# 垂直投げに



練習で感触はつかんだつもりだったが、プーメランは直線的に前に飛ぶばかり。戻ってくるのが見えない。同じグラウンドでソフトボールの練習をしていた子どもたちの視線が痛い。

一方、梅井さんは、時速100km/hは出るという競技用プーメランを手にした。ヒュルヒュルと風を切る音とともに、元の位置にピタリ。アクロバティックなポーズを決めながらキャッチを試みる姿に、しばし見とれてしまった。

ここで最後のアドバイス。「風向きに対し50〜60度の角度、時計で言えば2時の方向に投げる」と。そういえば、梅井さんはゴルフフェアのように、雑草を手からパラパラと落とし、風を確認していた。私も見よう見まねで風向きを計算して再チャレンジ。行ったときのプーメランを拾うため走り回り、疲れがピークに達したころ、何とかキャッチに成功した。試行錯誤の末、たどり着いた結論は次の通り。「三つのアドバイスを守ればだれでもプーメランを楽しめる」

しかし、時のたつのを忘れるほど楽しいひとときを過ごしたツケは翌日、回ってきた。日ごろの運動不足がたたり、肩が上がらなくなっていたのだ。



- ①初めてプーメランに挑戦②アクロバティックな姿勢でキャッチする梅井さん③翼の数や形もさまざま



まずは室内での初級編。紙製で3枚翼のものを使った。梅井さんの手を離れたプーメランはぐるりと部屋を一周、測ったように手元に戻ってくる。ここで最初のアドバイス。「プーメランは垂直に立てて投げる」と。ん、テレビや映画では水平に投げているぞ？

もう一つ納得できない私に「平らなものを水平に投げるのは既成概念にとらわれている証拠。垂直に投げない限り絶対に戻って来ません」と梅井さんは続けた。

そして私の番。何度やっても天井近くまで上がり、ストンと落下してしまう。失敗続きに少々あせり、力まかせに投げる私に梅井さんは二つ目のアドバイス。「手首のスナップを利かせること」。言われた通り、回転を与えると私のプーメランもよたよたしながら弧を描き、ようやく手の中に納まった。うーん、気持ちいい。コツを覚えると後は面白いようにうまくいく。

調子に乗ってきたところで、近くのグラウンドに移動。先程の